



が大切なですね。

山崎 よく耳にする「人は生きてきたように死んでいく」という考え方に、僕は否定的。「人は死ぬ瞬間でも、変わり得る！」って信じています。

岡田 私も、死の間際に変容する人と家族をたくさん目撃してきました。死を意識する時になって初めて、何か一番深いところが湧いて出てくる、どこかが動く感じでしょうか。「死」って、本質的には動的なものですよね。

山崎 そう、「今」だけでなく、「これまでの価値」や生きてきた過程の意味を確認していく対話がスピリチュアルケアです。僕のスピリチュアルケアについての考えは『在宅ホスピス』という仕組み』（新潮選書）の第9章にありますので、ぜひ読んでみてください。

死ぬという普遍をどう評価するか

山崎 エビデンスは医療では最重要視される基準ですが、それを絶対的なものとする、個別の人生観や価値観に基づく、一人ひとりの訴えを無きものにしてしまう可能性があります。その人の心の奥底にある物語に耳を傾けてほしいと思います。

岡田 見えないもの、形なきものを言語化することでしょうか。一人ひとりの体験談や物語ほど強いものはない、と？

山崎 ただ、一つひとつの物語は個人的体験に過ぎないんです。共通点を見出すことで、普遍化できることもある。それらの普遍性に基づいた上で、「死ぬ」という人類に普遍的な、しかし個別的なことをどう支援するのが大切だと考えています。

古川 ある患者さんが、「山崎先生はね、名医じゃないの。“名人”なのよ」とおっしゃっていたのが印象的でした。“人として”なんですよ。

山崎 幸せな死、納得できる死であると思います。ウクライナでの死でさえ、無残であったかどうかはその人がどう死に向き合ったかで決まるはずですから。

岡田 そうですね。僕は、「ある人の死は、その人だけのものではない」ということも本に書きました。先生が仰るように、その人が生きて死ぬまでを私たちがどう受け止めていくか、そしてその人の死後もその人と知り合った人たちが、その人の生死の何に気づいて、どう語るかによって変わり続けられます。

「死後の世界」の話を五万と聞いてきた

岡田 ホスピスケアの患者さんに「これからどうなると思いますか？」と聞くと、多くの人が自分の死後や残していく人たちに馳せる思いを語ってくれましたよ。

山崎 今や死生観を語り合う時代です。もっと言うと、死後の世界について語り合う関係性が大事になってくるんじゃないかな。僕は死んだら居酒屋をやりたいんですよ。それを話したら、「じゃあ先生、僕をその2号店の店長にさせてください」ってある患者さんが。え、それって僕が絶対先に死なないといけないねって笑い合いました。これが、死を目前にした二人の会話です。他にも「その店で働かせてください」って言う人も多くて、「早く死ねること？」なんて話しています（笑）。僕は大腸がんのステージIVなので、若くて死にそうもない医者が言う気休めじゃなくリアリティのある話でしょ？ 病気になるってよかったと思うことのひとつです。

岡田 病気体験も当事者としての権威を持ちますね。実を言うと僕、自分を捨ててまで他者を愛せない偽善を自他ともに見て嫌悪し、生きる意欲を失っていたことがありました。そんなとき、人の限界を超えて全ての人たちに降り注いでいる愛を体感したことがありました。生かされている目的は個の完璧さではなく、人と人が共に限界の痛みを負いつつ支え合うことなのだと。

古川 ある牧師さんが、「イエス・キリストの言うことを絶対だと信じて『アーメン』としか言わないクリスチャンにはなるな」と教えてくれたことがありました。反抗し、悩みぬいてこそ、愛はある日ふと“降って”くるのだと。

岡田 人智を超えたところに問い続けてこそということですね。古川さん、あなたの言葉は美しいですよ。

古川 ありがとうございます。迷ったときにはつい山崎先生に相談しますが、職種や資格といったものを超えたところへいつも導かれています。今は、音楽の力も模索しています。

山崎 知識があると自己流になりがちです。人智を超えることが、それを中庸に戻してくれることもあります。多少頼りなくても、気持ち聞いてもらいたいと思ってもらえる人になりたいですね。またぜひ語り合しましょう。■



「死んだ後、何がしたい？」 を語り合える人になりたいね

山崎章郎さん×岡田圭さん×古川ひろみさん

レポート 編集室

長年、ニューヨーク訪問看護サービスのホスピスケアでスピリチュアルカウンセラーとして働いてきた岡田圭氏。氏は医学書院からこのたび『いのちに驚く対話——死に向き合う人と、私たちは何を語り合えるのか』を上梓し、2024年8月から一時帰国して各地で講演や対話の場を広げてきました。そのような中、日本における在宅ホスピスの先駆者である山崎章郎氏と本を通じて意気投合。編集室は、ケアタウン小平にてお二人が語り合う機会に同席することができました。

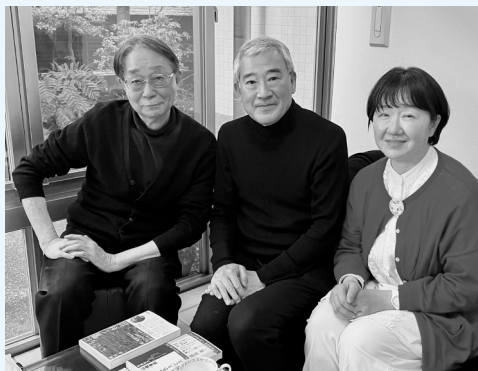
「私がこれまでやってきたことの確認になりました」

岡田 「渡すべき人に会うのではないか」という予感から悠翔会の業績報告会&経営計画発表会に持っていった1冊を、期せずして再会できた山崎先生に手渡しました。山崎先生は2度も読んでくださって、「またお会いしたいです」とお便りをくださったので、私もぜひお会いしたいとお返事したら、わざわざ電話してくださって。

山崎 私たちがこれまでやってきたことと、立ち位置の確認になりました。それで「ケアタウン小平にお越しになって、もう少し話しませんか」とお誘いしたんです。ここのケアマネジメントセンター所長・古川ひろみさんにもこの本をお勧めしました。

古川 そうなんです。でも、「その本、持ってます！ ちょうど今日から読み始めようとしてたところなんです」って。驚きました（笑）

山崎 私たちが日本で長年ホスピスケアに携わってきて気づいたことと重なることがたくさん書かれていました。「死に向き合う段階になると、民族も宗教も関係ない。いかに『自分の在りよう』にたどり着けるかなんだろうな」と思っていたことを、まさに“人種のるつぼ”ニューヨークで岡田圭さんも感じていたなんて。僕は英語が話せないけれど、もし話せたならば全人類と対話できるんだという気がしたんですよ。



左から山崎章郎氏、岡田圭氏、古川ひろみ氏。

自然体でいればいいわけではない

山崎 圭さんに「ニューヨーカーと日本人、どう違いますか？」と尋ねたところ、「自己主張しますよ」と仰いました。謙虚さを重んじる日本では自己主張が否定的に捉えられることもあります。主張というより表現でしょうか？

岡田 仰る通り、ハッキリと言うのは表現ですね。でも、相手の話をちゃんと聞き、受け止めた上で言うことを心がけねばならないのが味噌ですが。日本社会は常に「どう他人から見られるだろうか」などの気遣いや遠慮に縛られていて、自分が感じたことを素直に発言したり、表現したりしにくそうです。もっと自由になっていいのですよね。

山崎 まさにそのメッセージが、この本に書かれている圭さんと患者さんの物語からも読み取ることができます。対人支援サービスに携わる人にとっての基本的な考え方で、職種や立場による違いはありながらも、同じ人間としてその人と出会えるかが大事。若い医療職は陥りがちですが、技術や知識の不足からどうしても自分を大きく見せようとしてしまいます。でも、知識がないことと分からないことはイコールではない。「私も分からないから、一緒に考えてみましょう」と言われることが力づけになる。かといって、自然体であればそれでいいわけではないのがホスピスの現場の難しさです。エビデンスのような「枠」からはみ出たところにあるものを学ばせてもらう姿勢と、その意思を表示することが必要なんでしょうね。

岡田 その通りですね。日本でこれまで「その人の人生全体を魂のレベルで理解しましょう」などという、人にはできないほど高い目標を講義等で聞くことがありましたが、分からなさに学ぶこと